生活の唄

石坂洋次郎著

三笠新書

著者紹介

明治32年1月青森縣に生る。
慶應義塾大學國文學科卒。
故郷にて教員生活中「若い人」を書き後文筆生活に入る。
主著「若い人」「麥死なず」「丘は花ざかり」「青い山脈」等多數あり。
現住所　東京都大田區田園調布4ノ190

生活の唄

昭和30年5月30日　第1刷刊行

¥120

著者　石坂洋次郎（いしざかようじろう）
刊行者　竹内富子
印刷者　堀内文治郎

發行所　東京都千代田區神田神保町2ノ20　株式會社　三笠書房

電話九段(33)6504・7483振替東京22096

堀内印刷・黒田製本

生活の唄

石坂洋次郎著

三笠新書

目次

I

夜の客……9
顔面神經痛……15
犬の作文……20
スーキ碌々……32
風流……40
Sの話……47
午前の憂鬱……56
似たような話……61
鶏物語……63

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ひとりの唄……78
木割り……88
豚はジャムプの名人……96
おせつかい……104

II

小説の勉強……111
スポーツと文學……116
わが行く道……120
わが道を往く……123
太宰治の死……127
水上さんのこと……132
葛西善藏氏の覺え書……139

Ⅲ

娘の結婚について……153
結婚について……162
戀愛と結婚……167
平凡な女性……172
早婚座談會……177
新郎K君……185
妻は下婢ならず……203
キモノ……208
あとがき……214

I

夜の客

外にはピューピューと吹雪が吹きすさんでいる。私は炬燵に凭れてラジオの音樂をきいていた。

「どうしたんでしようね、まだ歸らないのかしら？　いま何時？」

風邪氣味で早くから床にもぐつていた家内が、隣室から、何度目かの同じ言葉を投げかけた。

「九時半だ。——どうしたんだろうな」

「この雪で行先が見えないから水道の穴にでも落ちたんじやないかしら？」

「落ちれば匍い上るさ。子供じやないんだから……」

私共は、その晩、映畫に出かけた娘の歸りを待ち侘びていたのであつた。ハネるのは八時半だから、どんなにゆつくり歩いても九時までには歸つて來なければならない筈だし、またこれまではその時刻にはいつもキチンと歸つているのであつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ふと、吹雪にこもつて女の話聲が聞えたような氣がした。と思うと、玄關の戸がガラガラと開いて、娘が歸つて來た。

「ただいま――」

冠り物をとつた娘は、私にそう挨拶して、いきなり家內が寢ている室の襖を開け、いくらか遠慮した調子で、

「ね、母さん、家にお客さんを泊めてあげてはいけない？」

「お客さんつて何處の方だえ？」

「それがね、知らない人なのよ。映畫館で隣に坐つていた姉妹の人で、今晩泊めてくれつて頼まれたんだけど……」

「知らない人なんていや！」と家內が癇癪を起した聲で云つた。

「だつて、母さんに頼んで泊めて上げるつて、もうその人達、玄關まで來てるのよ。困つたわ」

「まあ、來てるんだつて……玄關に……呆れたねえ、お前には……」

こと重大と感じたらしく、家內は丹前をひつかけて炬燵に起き出して來た。顏付がだいぶ險しかつた。

「聞きましたか、貴方。一體どうしたつて云うのさ？」

「それがね……困つたわ……」

話のうまくない娘が、玄關の客に遠慮した小聲でボソボソ語つた所によると――、姉妹は北常盤附近の農家の娘達であるが、二度目の應召で北海道の紋別に駐屯している兵隊の兄に面會しなければならない用事が出來た。本來ならば父親は亡し母親が出かける所なのだが、折惡しく病臥中なので、二十一と十八の姉妹が代つて行くことになつた。ところで北常盤驛は小驛で近距離の切符しか賣つておらないので、北海道行の切符を求めるためにはまず弘前驛までやつて來なければならない。そこで姉妹は背負えるだけの食糧を背負つて今朝の一番で北常盤驛を發つた。そして午前六時頃弘前驛に着いたのであるが、もうその時刻には昨夜から泊り込みの切符購入者が長蛇の列をなしており、姉妹の者は、待合室を出端れた吹きッさらしの廊下まで延びた列の最後尾に着くしかなかつた。それから待つた待つた、夕方の五時頃まで待ち續けたが、それでも姉妹は行列の中ほど位しか進んでおらなかつた。このまま夜明ししては凍え死にするかも知れない、切符は明日のことにして兎も角も外へ出よう、そして宿屋に泊るのは恐いから、一とまず映畫館にでも入つて、そこでまわりに親切そうな女の人でもおつたら、その人に賴んで一晩泊めてもらうことにしよう……。姉妹の者は、狡いような、悲壯なような相談をしながら、おりからの吹雪の中を映畫館の灯を求めて歩き出した。

そういう大變な伏勢がいるとは知らず、私共の娘は偶然隣席に坐つて、姉妹のいわゆる「親切そうな人」にされてしまつたと云うのである。

「まあ……まあ……呆れたね」としきりに呆れている家内は、娘の話が終ると、玄關の方に向つて、甲高い聲で「さあ、お入りなさい、そこに立つていると風邪をひきますよ、今晩は泊めてあげますからね……」

娘の案内で姉妹というのが入つて來た。紺絣のモンペにお揃いの赤縞の筒袖を着て、一人はリュックサック、一人は大きな風呂敷包を抱えていた。樣子に垢染みたところが無く、いずれ中流の農家の娘達に違いない。姉妹とも色が白く、胸が厚く、林檎色の頰をした典型的な津輕娘で、この娘達の兄ならばきつと逞ましいい兵隊さんに違いないと、ふと思わせたりした。無理にすすめて炬燵に入れ、家内が矢繼早に發する强引な質問に、姉妹がポツリポツリ答えたところは、娘の話したことと大體變りがなかつた。

「さあ、それでは休みましよう。貴女方はとつぜん來たんだから窮屈でも一つの床に抱寢をしてもらいますよ。朝はゆつくり起きてもいいんですからね……」

「ほんとに濟みません。ただもうお室の隅に坐らせて置いて戴けば結構なんです。それから明日の朝は、二時か三時に起きてまた驛へ行つて並びますから、御挨拶もせずに出て參りますから……。いずれ北海道から歸つたら御禮に出ますけど……」と姉娘が何べんも頭を下げながら云つた。

「御禮なんか要らないから、風邪をひかないように休むんですよ……」

娘は姉妹に手傳わせて別室に床をのべ、ついでに便所のありかなどを教えてやつていた。間もなく家中がシンとなつた。

「なんだか變ねえ……」

「ウン、變だ……」

床を並べて休みながら、家内とそんなことを呟き合つて、しばらくまじまじしていたが、間もなく私はグッスリ寢入つてしまつた。吹雪は一晩中吹き荒れていたらしい。

朝起きると姉妹は姿を消していた。顏つきなども思い出せないし、何だか昨夜のことは夢のような氣がした。しかし、夢でない證據には、姉妹の蒲團は室の隅にキチンと折り疊まれてあつたし、机の上には、お禮の意味だろう、大きな鰯が五枚、紙に包んで載せてあつた。

炬燵の上で、温かい湯氣のたつ朝飯をしたためながら、家内はクドクドと娘をたしなめた。

「大體お前が間の抜けた顏をしてるから人につけ込まれるんですよ。外に出たら、いつでも口をキチンと締めて、少し恐いぐらいの顏つきをしてるもんだよ、娘というものは……」

「でもそんな恐い顏をしていて、何處からも縁談が來なかつたらどうするの？」

ふだん煩いくらい嫁の話をきかされている娘は、妙に落ちついて母親に應酬した。

「何だねえ、此の子は親に口をかえしたりして……。ともかく今度からは家の中に知らない泊り客なんか連れて來るのは眞平だからね。もつとお前しつかりしなくては……人に甘くみられ

るのは恥だからね」
「ウン、連れて來ない――」
娘は少し不服そうだつた。私は女達のつまらん話を聞きながら泊り客の殘していつた鯣を炙つて嚙つていた。少し固いが、味のある、いい鯣だつた。
それから一週間ばかり經つたよく晴れた日に、犬の毛皮を着た、見知らぬ田舍の老人が私の家を訪れて、北常盤村の姉妹の家から賴まれたと云つて、重い紙包を置いて行つた。中には色のついた干餅が五つと、それに添えた禮狀が入つており、お蔭で北海道に渡つて兵隊の兄に會うことが出來ました、兄も元氣で御奉公しておりましたと報じてあつた。
干餅は、炭火でカリカリするぐらいに燒いて食べると、後ねだりしたいほど美味かつたし、よそへも分けてやつたりしたので、すぐに無くなつてしまつた。時節柄、ふと口さびしく感じる折ふしに、私はその干餅の味を思い出し、娘に向つて、
「オイ、お前また何處かでお客を拾つて來んかな」と呼びかけることがある。
「お客なんて眞平。……でも鯣や干餅はそう惡くも無いわね……」
今年二十歳の娘は、笑いながら眼をパチパチさせて兩親の身勝手な放言を聞いている。大人なんて凡そ淺ましいものね、ぐらいのことを考えてるのかも知れない。（昭和二十・八）

顔面神經痛

私は今年の正月、顔面神經痛を患つた。はじめの自覺症狀としては唇に力がなくなり、煙草を啣えるのが不自由になつた。私はそれを齒莖が腫れたせいだろうと思い、大して氣にもかけなかつたが、唇の痲痺は一日增しにひどくなり、啣えている筈の卷煙草がポロリと落ちたり、啜つた筈の味噌汁がダラダラこぼれ出すようになつた。もしやと思い、鏡に顔をうつしてみると、鼻の先が曲り、左の半面がたしかにズレていることが分つた。

「おい、顔が曲つたよ」と私は家內や娘に吹聽した。

「どれどれ。なるほどね。でも、まあ白髮が生えるようになつてからでよかつたわ」

家內は人差指の上に私の顎を載せて、ためつすがめつ私の顔をうち守りながら云つた。人の痛いのは百年でも我慢するといつた調子に感じられて憎らしかつた。

私は近所の醫院に出かけて診察を受けた。醫者は私の左側の頰に觸つたり、眼を開閉させた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com